



戦火に燃える那覇と守礼門

古波鮫 唯成さん (当時16歳)

描かれているのは昭和19年10月10日の十・十空襲の様子です。古波鮫さんは那覇市泉崎の自宅から宜野湾市の親戚の家へ避難する途中、首里城の守礼門のあたりから炎上する那覇市街地を自撃しました。遠くに見える街からは赤い炎と黒い煙があがっています。



あいさつする小泉内閣総理大臣



平和宣言する稲嶺知事



自作の詩を朗読する上原 凛くん

戦後六十年の節目 恒久平和を祈る



やんばるの渡河

金城 智恵子さん (当時23歳)

金城さんは、昭和20年3月の終わりに4月の始めにかけて大里村から本島北部へ避難していましたが、今の金武町から北へ向かう山中で、川に行く手を阻まれてしまいました。日本軍によって、橋が壊されていたのです。絵には、金城さんが生後1ヶ月の長男を両手で差し上げて、胸の近くまで冷たい水に浸かりながら川を渡った様子が描かれています。



六月二十三日、慰霊の日に、太平洋戦争で亡くなられた多くの方々に慰霊するため、糸満市摩文仁の平和祈念公園において沖縄全戦没者追悼式を開催しました。

戦後六十年の節目に当たる今年には、小泉内閣総理大臣を始め河野衆議院議長、扇参議院議長が参列するなど、五千人を超える多くの方々が訪れ、会場周辺は平和の祈りに包まれました。

稲嶺知事は「世界の恒久平和の実現に向かつて前進していく決意」と平和宣言、また、与那原東小学校六年の上原凛くんは自作の詩「平和な今」で「ぼくは戦争を知らない。でも戦争はいやだ。毎日を大切に生き、人の痛みを感じ、平和な今に感謝する」と朗読しました。

父の勇気に救われた家族 金城 善昌さん (当時10歳)

昭和20年6月23日、金城さんの家族は旧真壁村真栄平の壕を出て米軍の捕虜になりました。一番左側に描かれているのが父親、右隣が金城さん自身です。米軍からの「何もしないから出てこい。あと1時間後には攻撃を始める」との投降の呼びかけに、金城さんの父親は、家族や近所の女性たちに声をかけ、先頭に立ち壕を出ました。金城さんは初めて見る米兵への恐怖で体が震えましたが、住民に水や食料の缶詰が与えられ、危害を加えられることはないかとわかった、子ども心に生き抜いた喜びが沸き上がってきたそうです。



また、追悼式前日の二十二日に平和祈念堂で前夜祭が、二十三日には平和祈願慰霊大行進が行われ、県内外に平和の尊さを訴えました。

一方、平成十六年十二月からNHK沖縄放送局と県で募集していた「体験者が描く沖縄戦の絵」には、県内外二百八十九人から五〇三枚の応募をいただきました。

描かれた絵は、艦砲射撃や野戦病院、米軍への投降など多岐にわたっており、中には、大きな油絵や三・七メートルの絵巻物で表現されたものもあります。去る六月十一日から七月三日まで沖縄県平和祈念資料館で行った展示会では多くの方にご覧いただきました。この展示会、今後は、県内各地で行う予定です。

